

あお  
**青**

かげ  
**景**

—青景氏館周辺遺跡の調査—

1994

(財)山口県教育財団  
山口県教育委員会

## 序

山口県では、恵まれた自然環境のなかで豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策が進められています。

私たちの郷土山口を築いてきた先人の永い営みを今に伝える歴史的遺産を、こうした開発事業との調整を図りつつ記録にとどめて後世に残すため、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会では、県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財について発掘調査を実施しております。

平成5年度は、美祢郡秋芳町大字青景に所在する青景氏館跡の発掘調査を実施し、当時の人々の生活文化の実態を知る上で、数多くの貴重な手掛かりを得ることができました。

この発掘調査の成果をまとめた本書が、広く文化財愛護への理解を深め、教育並びに学術研究の資料として活用されることを願うものであります。

終わりに、発掘調査の実施に当たってご協力をいただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人山口県教育財団 理事長 高 浜 哲  
山口県教育委員会 教育長 高 浜 哲

## 例 言

1. 本書は、県営ほ場整備事業に先立ち、山口県農林部の委託を受けて財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が平成5年度に実施した、山口県美祢郡秋芳町大字青景字殿河内所在の青景氏館跡の発掘調査に係る概要報告である。
2. 調査は周知の遺跡「青景氏館跡」を対象としたが、結果として館跡を確認できなかったため、標題は「青景氏館跡」の名称を避けた。
3. 調査は財団法人山口県教育財団 事務局指導主事 土井 勉および花岡隆義と、山口県埋蔵文化財センター 文化財専門員 岩崎仁志が担当した。
4. 調査にあたっては、地権者をはじめ、地元関係各位から多大な援助・協力を得た。
5. 発掘調査および遺物の整理にあたっては、山口県埋蔵文化財センター職員の応援を得た。
6. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の50,000分の1地形図「山口」・「西市」を複製使用したものである。
7. 本書に使用した方位は、国土座標（第3座標系）の北で表示し、標高は海拔標高で示した。
8. 本書の作成・執筆は岩崎が担当した。

## 本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査にいたる経緯	2
III 調査の概要	5
(1) 北区の調査	5
(2) 南区の調査	7
(3) 遺物	7
IV まとめ	12

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 調査区設定図	3
第3図 北区遺構配置図	4
第4図 北区掘立柱建物・溝実測図	5
第5図 北区土坑実測図(1)	6
第6図 北区土坑実測図(2)	6
第7図 南区掘立柱建物実測図	7
第8図 南区遺構配置図	8
第9図 南区溝実測図	9
第10図 南区墓実測図	10
第11図 遺物実測図(1)	11
第12図 遺物実測図(2)	12
第13図 調査区周辺字図	13
第14図 調査区周辺地形図	14

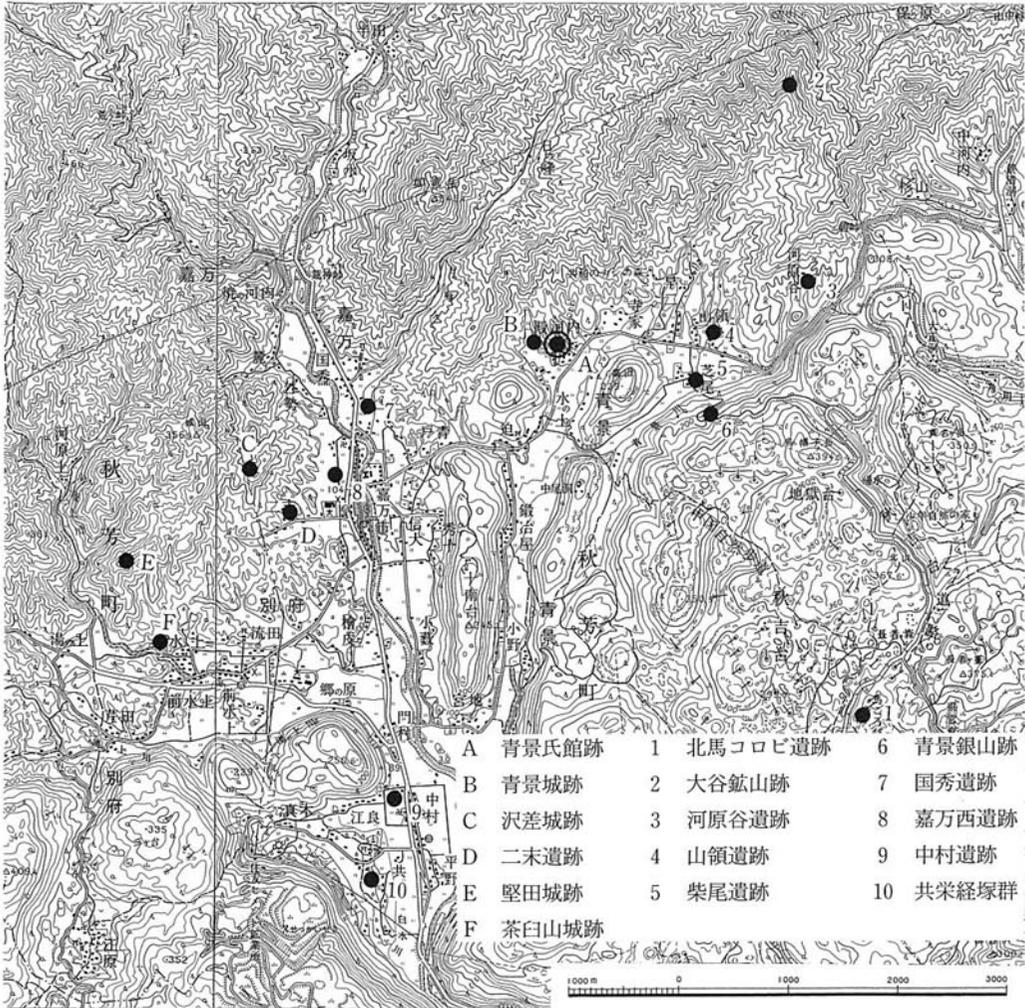
## 図版目次

図版第1 遺跡周辺(南上空から)
図版第2 遺跡周辺(上 北上空から、下 南から)
図版第3 調査区全景(上 北区、下 南区)
図版第4 北区土坑(上 SK01・SK02、下 SK04)
図版第5 北区羽口出土状況(上)および北区完掘状況(下)
図版第6 南区溝(上 SD02、下 SD03)
図版第7 南区墓(上 ST01完掘、下 ST01遺物出土状況)
図版第8 南区完掘状況(上)および出土遺物①(下)
図版第9 出土遺物②
図版第10 出土遺物③

# I 遺跡の位置と環境

美祿郡秋芳町の青景地区は、カルスト台地で著名な秋吉台の北西麓に位置する帯状の盆地である。この地形は石灰岩の溶食によるものであり、周囲の山肌には白い石灰岩が見え隠れる。青景盆地は10km程で日本海に至る位置にあるものの、水系の面では南流して瀬戸内海に注ぐ厚東川の上流部にあたる。また、青景盆地をはじめとする秋吉台の周辺部には接触交代鉱床が広く分布しており、古くから銅を中心とした金属資源を産出することで知られている。

青景盆地付近が人々の生活の舞台となるのは、秋吉台上の北馬コロビ遺跡の石器にみられるように、先土器時代にまでさかのぼる。しかし、人々が定着しはじめるのは縄文時代以後であり、この時代には遺跡が広がりを見せるようになる。今回の調査でも縄文土器片・石鏃などが発見されており、青景盆地でも集落が形成されていたことがわかる。そして、弥生時代には中村遺跡に見られるように、大規模な集落が出現しており、以後は絶えることなく人々の生活の



第1図 遺跡の位置

場となっている。古墳時代から奈良時代にかけては中村遺跡・国秀遺跡のように最古の国産銅塊を出土する遺跡が付近にあり、早くから金属生産地帯であったことがわかる。その代表的な例が秋吉台東縁にある美東町長登銅山であり、東大寺盧舎那大仏鑄造に際して銅を送ったことで著名である。

中世にいたって、青景地区一帯を支配したのは青景氏である。青景氏は大内氏の家臣であり、寿永4(1185)年に地頭として入地した。そして弘治元(1551)年の陶氏の反乱に与したため毛利氏の入国とともに門多と改姓するまでの370年にわたってこの地を治めた。その後は毛利氏に仕え、宝永6(1709)年には山口に居を移した。

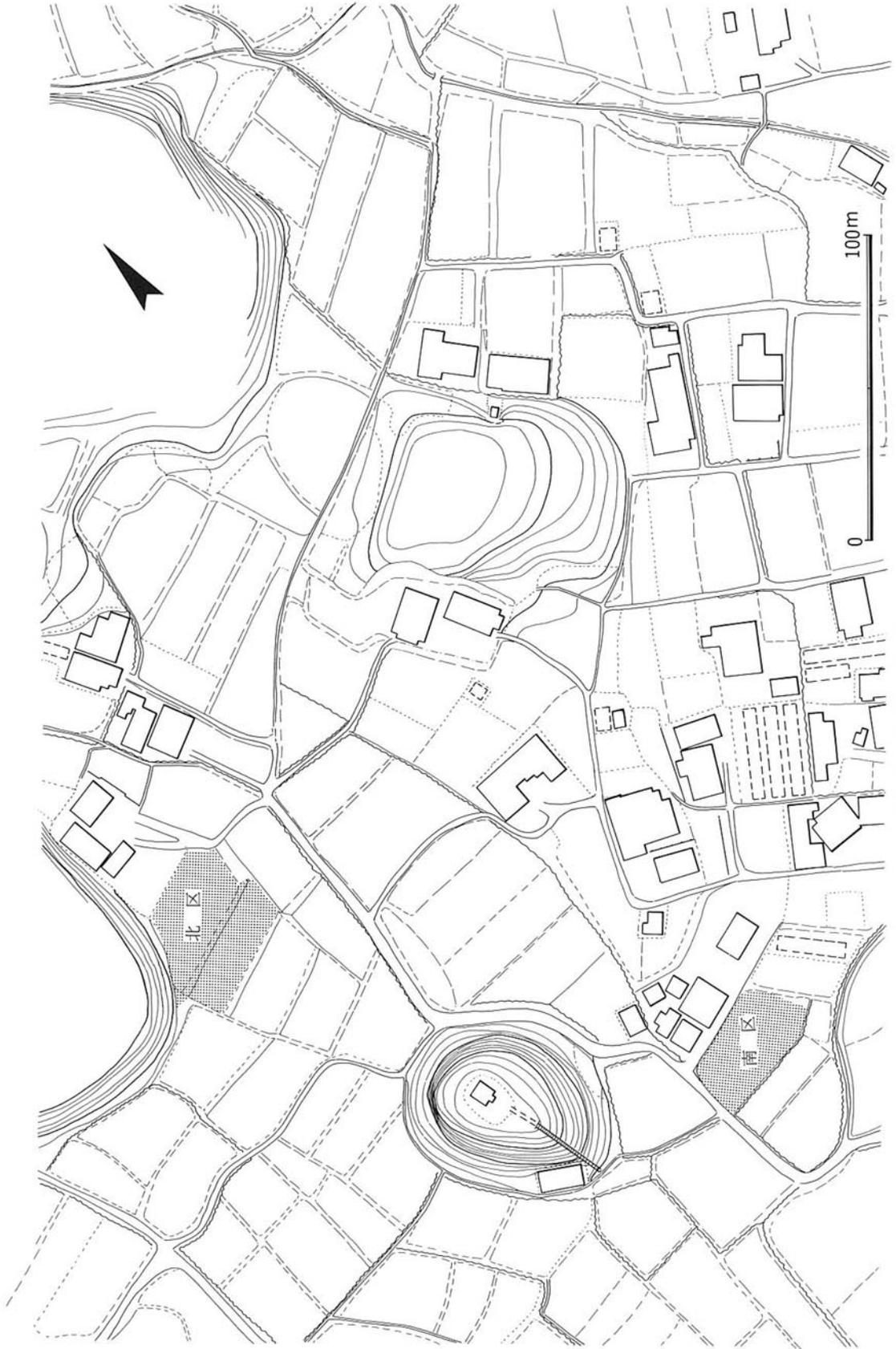
青景の歴史を考える上で重要なもののひとつに青景銀山がある。天正元(1573)年から寛永15(1638)年まで稼行し、文禄4(1595)年までの間が最も栄えたという。『防長風土注進案』によれば、その繁栄ぶりは町並の家数千軒におよぶほどであったという。しかし、銀山の衰えと火事によって繁栄は失われ、寛永3(1621)年以後の検地帳には町屋敷の記載がない。その後は水田を主とする農村として現在に至るのである。

参考文献 『防長風土注進案 第17巻 美禰宰判』(山口県文書館 編 1962)、『角川日本地名大辞典 35 山口県』(「角川日本地名大辞典」編纂委員会 竹内理三 編 1988)、『日本城郭大系 第14巻』(三坂圭治ほか 編 1980) ほか

## II 調査にいたる経緯

県内各地で進められている県営ほ場整備事業は農業基盤整備を目指すものであるが、同時に地下に眠る貴重な埋蔵文化財を破壊する可能性も高い。山口県教育委員会では、県営ほ場整備事業対象地区の埋蔵文化財保護のため、あらかじめ遺跡の分布調査を行う。確認された遺跡については現状保存を前提に山口県農林部耕地課と協議を行い、現状保存の困難な遺跡については事前調査を実施して記録保存をはかっている。

県営ほ場整備事業秋芳北地区の平成5年度施工予定地区を対象に、平成4年12月に分布調査を実施したところ、周知の遺跡「青景氏館跡」の隣接地に埋蔵文化財が存在することが判明した。この資料をもとに、山口県農林部耕地課と協議を行い、発掘調査の必要のある地区を確認・設定した。調査にあたっては財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が文化庁の国庫補助を受け、合同で発掘調査を実施することとなった。



第2図 調査区設定図



第3図 北区遺構配置図

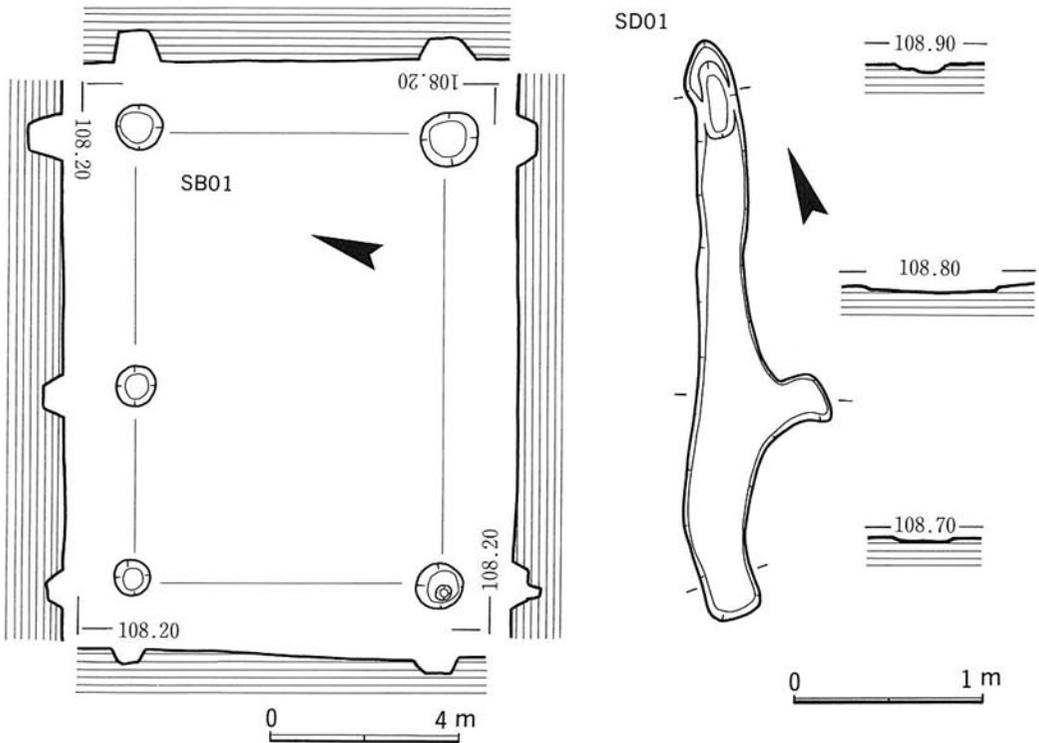
### III 調査の概要

今回の発掘調査は、遺跡の存在する範囲のうち掘削を免れない地点について実施したため、2か所に分けて行われた（第2図参照）。便宜上、この2か所を北区・南区と呼び分けることにする。現地での調査は、平成5年9月から同年11月にかけて、南北両区合わせて約2000m<sup>2</sup>の範囲を対象に実施した。まず、平成4年度の分布調査資料をもとに、重機を使用して遺構面直上まで表土を除去したのち、人力によって遺構の検出と掘り込みを行った。南北両区は並行して調査を実施し、写真撮影・遺構実測を行って現地での調査を終えた。以下、北区・南区に分けて調査の成果を概観する。

#### （1）北区の調査（第3図）

北区は背景城の南東麓にあたる地区である。遺構面は南に向けてゆるやかに傾斜しており、調査区の北半は開墾に伴って削られている。調査の結果、溝1条・土坑5基・柱穴約220個が検出され、土器・陶磁器・石器・スラグなどの遺物が出土した。遺構は12世紀から17世紀にかけてのものであり、遺物は整理箱1箱程度と少量である。以下、主要な遺構を紹介する。

SB01（第4図） 北区で唯一復元可能な掘立柱建物である。2間×1間の建物で、桁行4.8m、梁行3.3mである。桁行の軸方位はN72°Eである。柱穴からは15～16世紀の土器片が出土する。

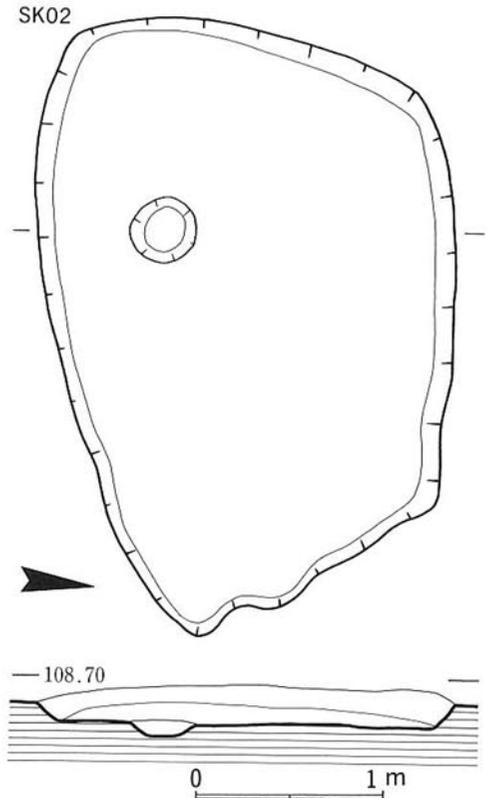


第4図 北区掘立柱建物・溝実測図

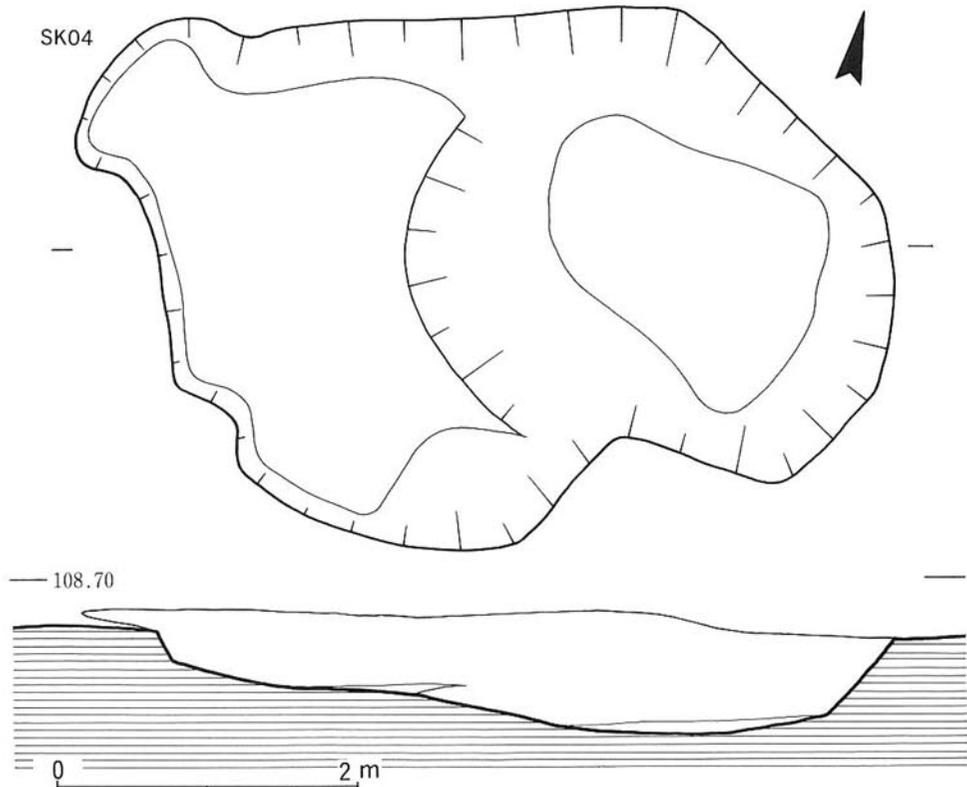
SD01 (第4図) ほぼ南北方向の浅い溝であり、中央東側に突出部がある。丘陵の等高線にほぼ平行することから、山裾を掘削して耕地化する以前の水路の痕跡と考えられる。遺物は出土しなかった。

SK02 (第5図) 台形に近い平面形をもつ浅い土坑であり、底面に小坑がある。長軸324cm・短軸220cm・深さ約20cmであり、埋土から出土した瓦質土器甕片(第11図 15)から15~16世紀の遺構と考えられる。

SK04 (第6図) 不整形の大型土坑であり、底面に段を有する。長軸555cm・短軸350cm・最深部の深さ約75cmであり、埋土からは土師器片とともにスラグが出土している。中世の遺構であるが、時期は特定できない。



第5図 北区土坑実測図(1)



第6図 北区土坑実測図(2)

## (2) 南区の調査 (第8図)

南区は北区の南約200mにある。遺構面は南に向けてゆるやかに傾斜し、北区同様に調査区の北半は開墾に伴って削られている。調査の結果、溝2条・土坑9基・墓1基・柱穴約200個が検出され、土器・陶磁器・石器・スラグなどの遺物が出土した。北区同様に遺構は12世紀から17世紀にかけてのものであり、遺物は整理箱2箱程度である。以下、主要な遺構を紹介する。

SB02 (第7図) 南区で唯一復元可能な掘立柱建物である。2間×1間の建物で、桁行4.0m、梁行1.9mである。桁行の軸方位はN88°Wである。柱穴からは17～18世紀の陶器(萩焼)片が出土している。

SD02 (第9図) 南北に主軸をもつ、断面V字形の溝であり、わずかに湾曲する。溝は検出部分の長さ16.3m、最も広い部分の上端幅1.0m、最も深い南端での深さ0.4mである。溝底には凹凸が多いものの、全体としては北から南に流れる溝であったと考えられる。出土遺物から、15～16世紀の遺構と考えられ、埋土に奈良時代の須恵器を多く含んでいる点が注目される。

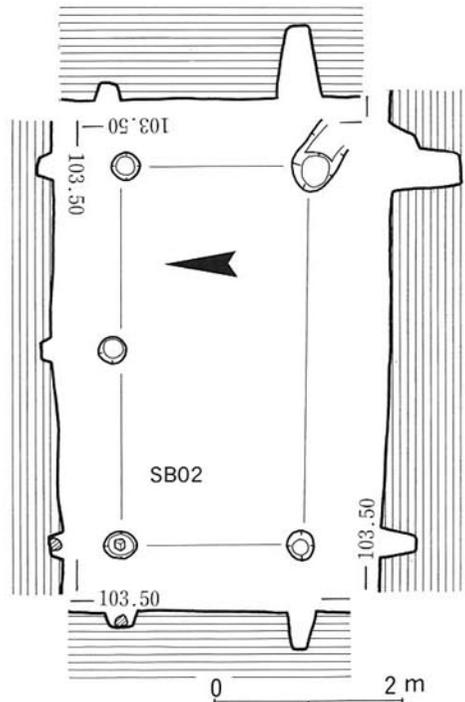
SD03 (第9図) 北西-南東に主軸をもつ湾曲した溝であり、断面は浅いU字形である。溝は検出部分で長さ16.0m、最も広い部分の上端幅1.5m、最も深い南端での深さ0.3mである。SD02同様に北から南に流れる溝であったと考えられるが、方向性の点でSD02とは差を生じている。出土遺物から17～18世紀の遺構と考えられる。

ST01 (第10図) 調査区南西端で検出された遺構であり、南半を失っていると考えられる。軸方位はN45°Eであり、残存部分の長軸120cm・短軸94cm・深さ約9cmである。坑底北端部から土師器杯・皿が出土した。これらの土器は坑底からわずかに浮いており、杯の周囲に皿を配して埋置した状況であった。人骨・棺材等は発見できなかったものの、土坑の規模・遺物の出土状況から墓と判断した。

## (3) 遺物

南北両区とも、遺構からの出土遺物は比較的少量である。

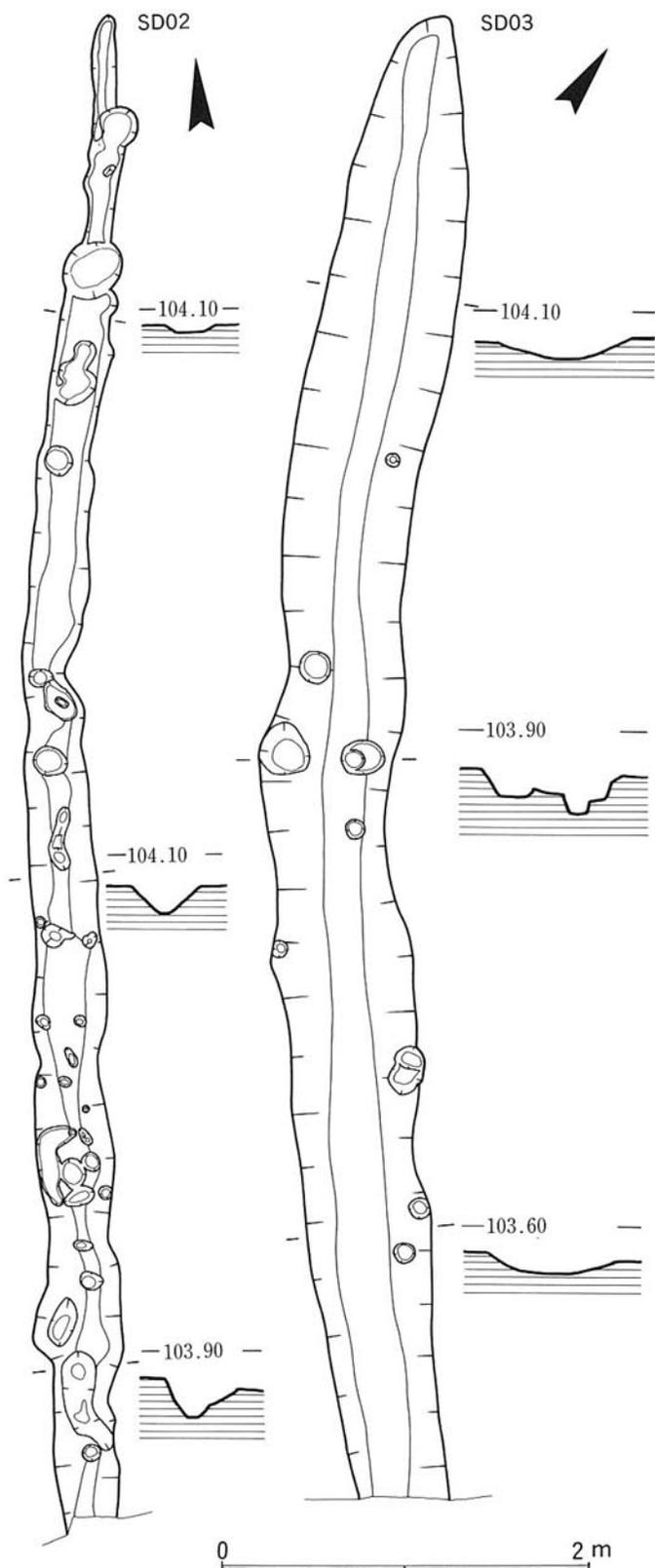
出土遺物には、土器・陶磁器・土製品・石器・石製品・スラグ等があり、南北両区は出土遺物の面からは共通部分が多い。以下、主要な遺物を調査区内・調査区外に分けて紹介する。



第7図 南区掘立柱建物実測図



第8図 南区遺構配置図



第9図 南区溝実測図

調査区出土の遺物  
(第11図)

1は北区包含層出土の打製石鏃である。石材は黒色の黒曜石であり、基部の挟りがやや深いことから、縄文時代に属する可能性が高い。長さ2.7cm・重さ13gである。

2・3は南区SD02から出土した須恵器杯身・杯蓋である。3は焼成不良のため軟質である。

4は南区SP05から出土した白磁碗である。見込に櫛描き文を施し、高台は基本的に無釉である。

5～9は土師器である。5～8は南区ST01の副葬品である。図示したもののほかに、土師器皿がもう1点(図版8 24)存在しており、いずれも橙褐色を呈する。9は北区SP03からの出土であり、薄手・乳白色である。

10は北区包含層から出土した石鍋である。体部はやや開き気味で、外面に鏝をもたない。

外面には煤が付着する。

11は北区包含層から出土した土師質の播鉢である。

12は南区SP13から出土した土師質の羽釜である。

13～15は瓦質土器である。13は足鍋であり、やや焼成不良である。14は鍋であるが、形態的には羽釜の影響を受けていると考えられる。同一個体と認められる底部破片は外面に平行叩きの痕跡が認められる。15は甕であり、口縁部外面に刺突文を施す。破片であるため、刺突文が全周に施されるのか否かは不明である。13は北区SK01、14は北区SP34、15は北区SK02からの出土である。

16は北区包含層から出土した鞆羽口先端部

であり、端部周辺にはスラグが付着している。外径12cm、内径3cm前後に復元できる。

17は北区SP32から出土した砂岩製の砥石である。4面を使用しており、表面には鉄分が沈着する。

#### 調査区周辺採集の遺物（第12図）

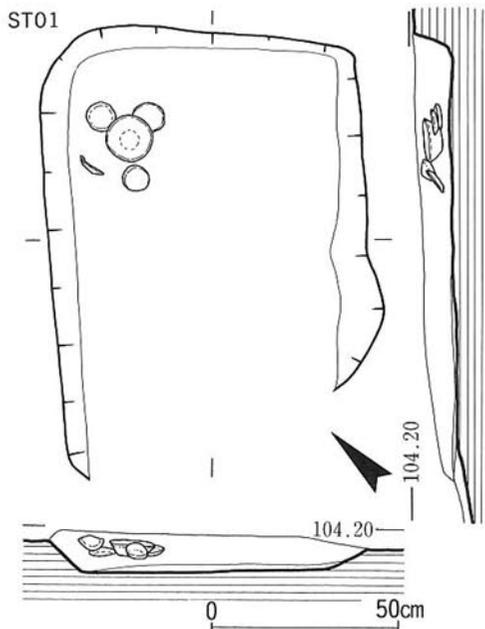
発掘調査中およびそれ以前に採集された遺物には、石鏃・土師器・瓦質土器・陶器・輸入磁器等があり、調査区から出土した遺物と時期的に重なる。以下に、特徴的なものを紹介する。

18は白磁皿である。底部は上げ底であり、口縁端部は釉を施さない。15世紀の輸入品と考えられる。

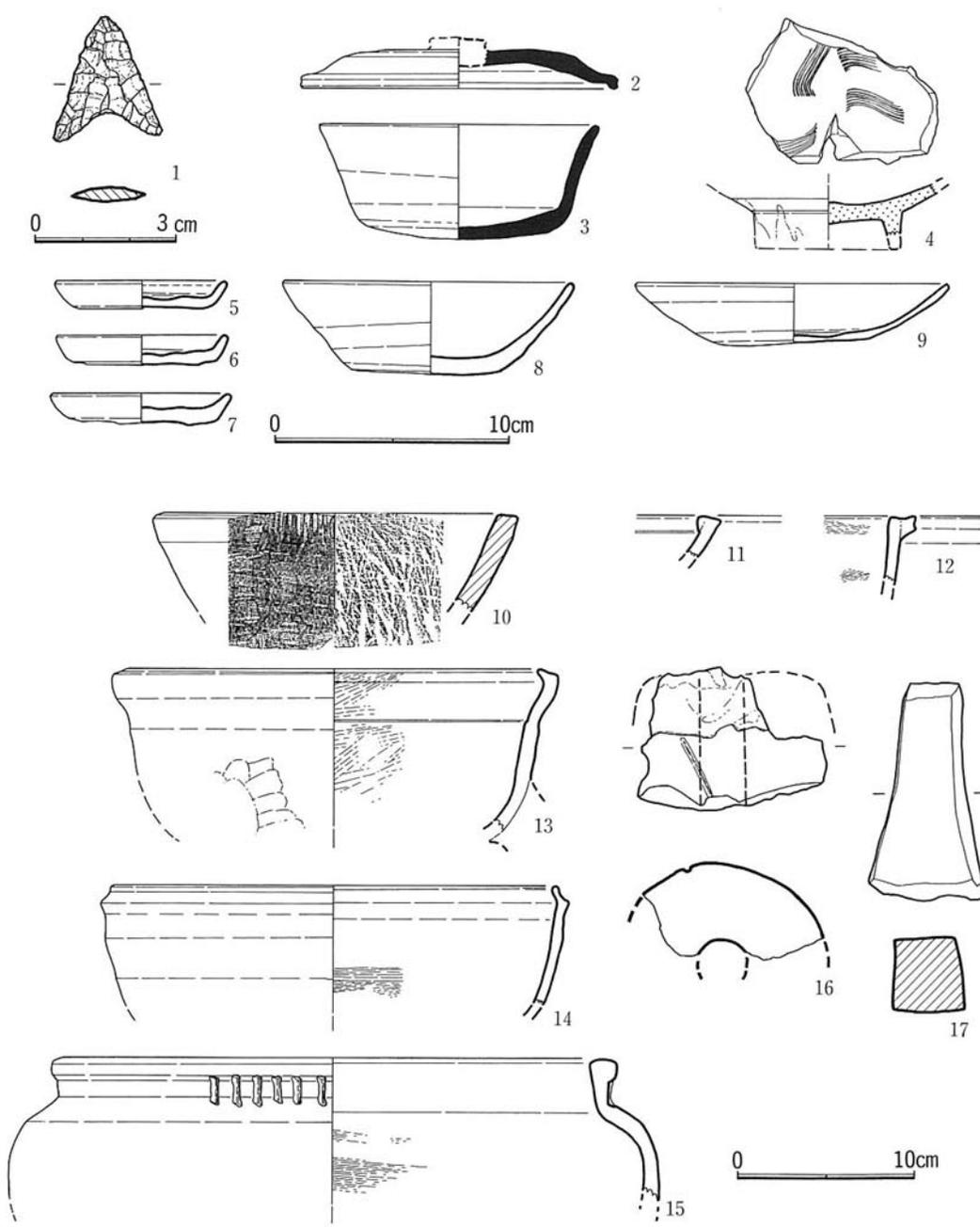
19・20は備前焼である。19は播鉢であり、使用による内面の摩耗が明らかである。20は壺であり、口縁部は玉縁をなす。いずれも、15世紀に属するものである。

21・22は陶器碗である。21は透明に近い釉を施し、肥前系の国産品と考えられる。22は厚目の白色釉を施したものであり、長門深川窯の萩焼と考えられる。

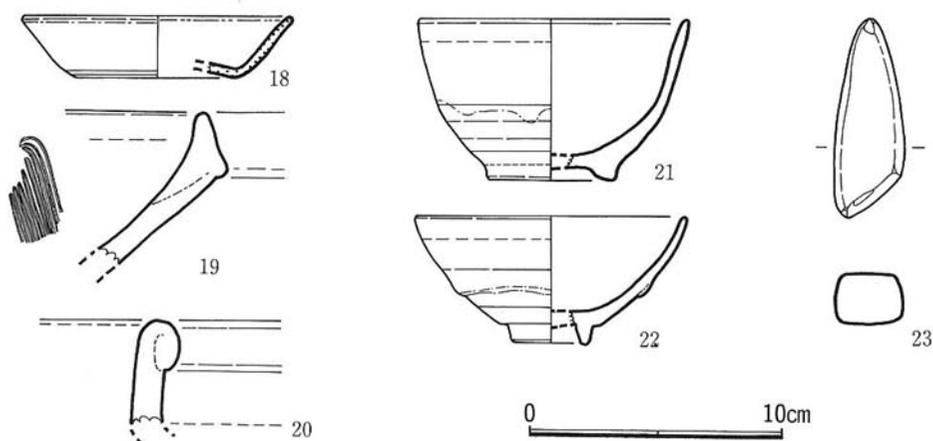
23は方錐状の土製品である。厚みのある土製品を転用して砥石の代りに使用したのと考えられ、5面を使用している。



第10図 南区墓実測図



第11图 遗物实测图(1)



第12図 遺物実測図（2）

## IV まとめ

今回の調査は、美祢郡秋芳町にある周知の遺跡「青景氏館跡」の一部を対象にしたものである。遺跡の所在する殿河内地区は、中世から近世初期にかけて付近一帯を支配した青景氏の本拠地と考えられており、調査による館関連遺構の発見が期待された。

発掘調査の結果、12～17世紀の集落がこの地に存在したことが確認できた。しかし、館跡の存在を積極的に肯定する資料を得ることはできなかった。以下に調査の成果を概観し、これを踏まえて青景氏館の所在地を検討してまとめに代えたい。

### 調査成果について

北区では、柱穴を主体とする遺構が調査区南端付近に集中する。柱穴数に比して復元できる掘立柱建物は少なく、調査区南方に遺構分布の中心があるものと考えられる。発見された遺構は13世紀から17世紀にかけてのものであり、量的には15・16世紀の遺物が最も多い。時期幅を考慮すれば、この地区の遺構密度は低いといえよう。

南区では、柱穴を主体とする遺構が調査区南半に分布する。遺構は12世紀から17世紀にわたるものであり、北区同様に復元できる掘立柱建物は少ない。16世紀以前の遺構配置は、溝(SD02)によって区画される建物群という構成である。溝以东が屋敷内であり、屋敷の外に墓が位置すると考えられ、全体としては溝によって三ないし四方を囲まれる形態である可能性がある。17世紀以降の遺構配置も、それ以前と同形態と考えられるが、溝(SD03)にみられる軸方向のずれが顕著である。このことは17世紀前後の時期に、土地利用に変化が生じたことを示している。具体的内容は不明であるが、土地利用の変化が青景銀山の稼行期と重なることは興味深い。遺物の面では、遺構に伴わないものの、須恵器片が比較的多いのが注意される。

南北両地区の調査成果を総合したとき、遺物が少量であること、遺構が同時期の農村集落と

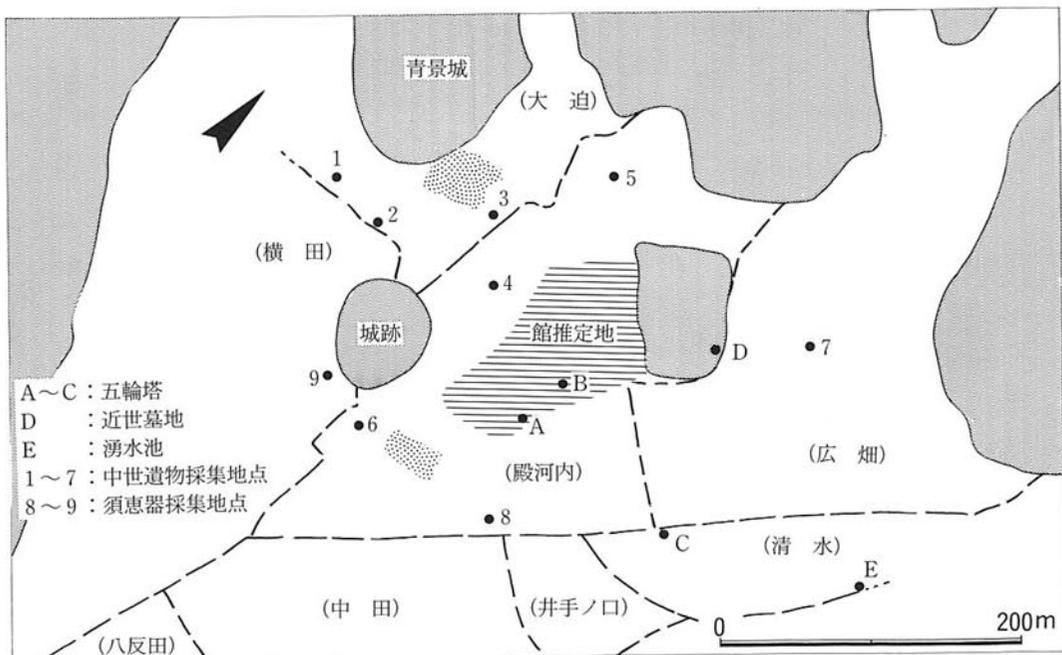
大差ないことなどから、今回の調査区が青景氏館の一部である可能性は低いと判断できる。しかし、集落の存在時期は青景氏の支配期間にほぼ対応しており、青景氏の動向がこの遺跡に反映されていることは確かであろう。

このほか、興味深い発見としては冶金関連遺物と奈良時代の遺物がある。冶金関連遺物は鞆羽口（北区）とスラグ（北区・南区）であり、遺構埋土にも含まれている。当時、この地区に工房が存在したことを示している。奈良時代の遺物としては須恵器杯身・杯蓋等があり、遺構に伴わない状態での出土である。秋吉台周辺が古墳時代にさかのぼる産銅地帯であることを考えれば、殿河内地区もまた奈良時代以来、銅生産に関わっている可能性もあろう。

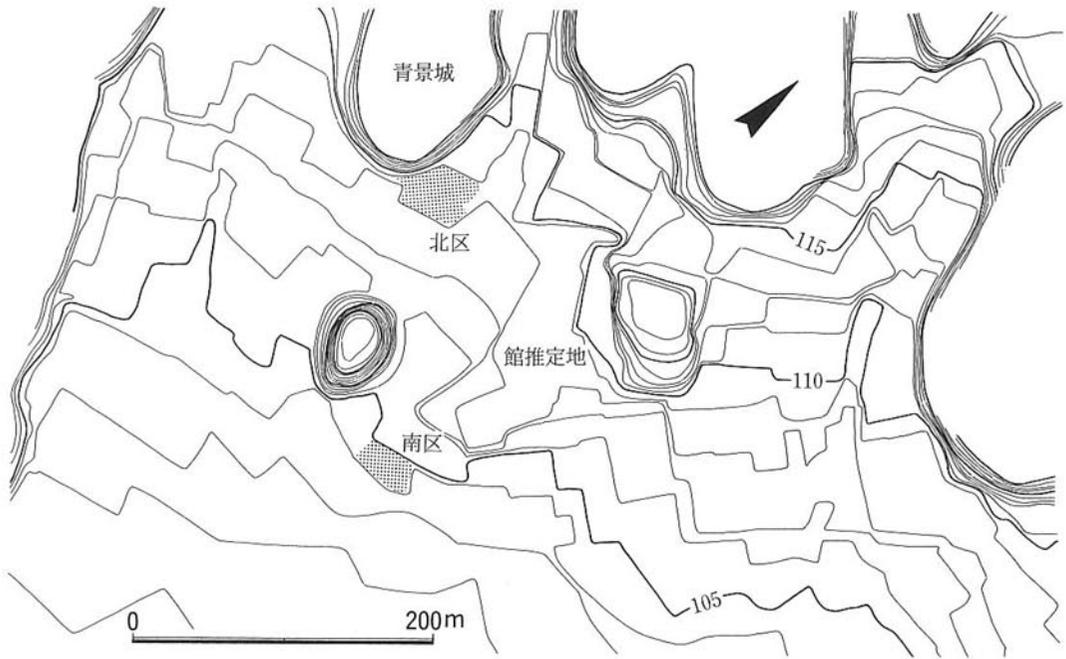
### 青景氏館跡の所在地について

青景氏の拠点とは、「防長風土注進案」以来、殿河内地区に比定されてきた。事実、青景周辺に存在する城跡は殿河内地区に存在する山城1か所であり、この城跡は「防長風土注進案」によれば青景氏の居城とされている。現在、青景城とよんでいる山城は、「く」の字城の盆地のを一望にできる要地にあり、旧往還道が眼前を通過する位置にある。そして、青景城の前面にある台地または小丘陵が館の所在地と想定されてきた。

青景氏館跡の所在地を考える上で手掛かりとなるのが、「殿河内」という字名である。現在この字名は、2つの独立丘陵と青景城および東西に走る県道に囲まれた地区である（第13図参照）。今回の発掘調査および周辺の表面採集によって得られた遺物は、12～17世紀が中心であり、これは青景氏の支配期間とほぼ一致する。しかも、これら遺物は、殿河内を字名とする範囲を中心に発見され、周辺からの発見は少ない。また、五輪塔が発見されるのも殿河内付近で



第13図 調査区周辺字図



第14図 調査区周辺地形図

ある。「殿河内」の字名をもつ地区で実際に館跡が確認された例(山口市 殿河内遺跡)があり、秋芳町の「殿河内」に館が存在した可能性は非常に高い。

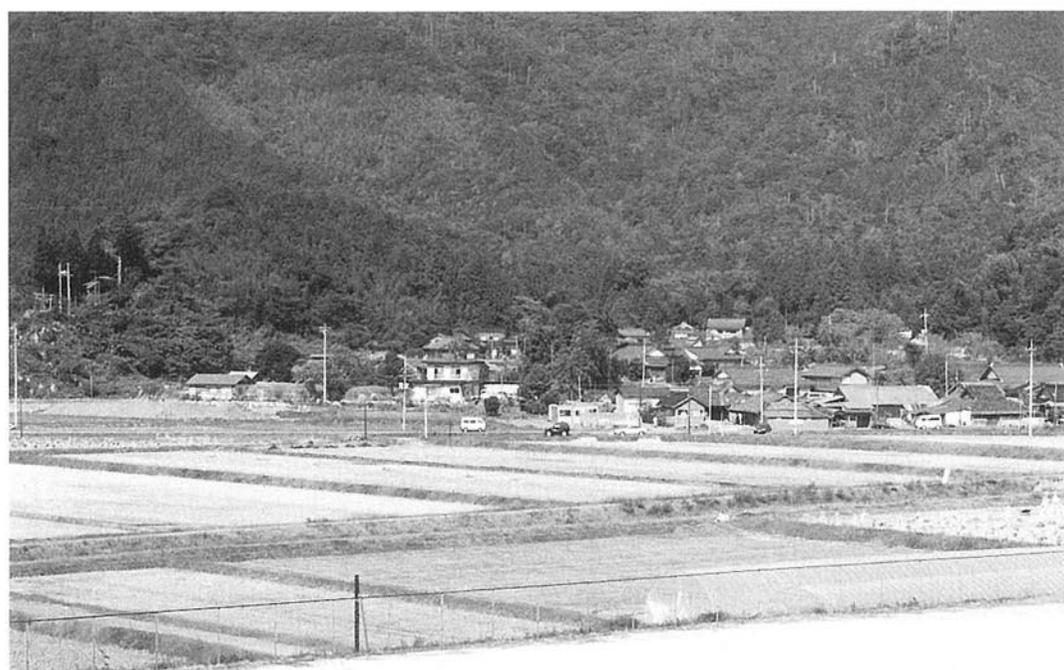
この地区内で館の占地可能な地点を求めると、その範囲は限定される。すなわち、2つの独立丘にはさまれた台地がそれであり、7000㎡程度の平坦地が存在する。東の丘は北側に大規模な堀切を持っており、この丘が館に取り込まれていたことを示している。現在残る字名を見ると、館推定地である殿河内周辺に広畑・清水・猪ノ鼻・井手ノ口・中田・横田・大迫・八反田などがある。このほか、広畑北方にはトノサマ堤と呼ばれる堤があり、館推定地南東にはモンゼンの門名も残る。このうち、広畑は領主直営田(用作)と推定でき、井手ノ口は館に伴う水利施設と関わる可能性がある。トノサマ堤については用作との関係や水がかりを検討せねばならない。

青景地区は、広範囲にわたって地名・伝承・水利等を詳細に調査・検討すれば、中世居館を中心とした村落景観を復元することが可能である。今後の調査によって、より多くの貴重な資料が得られるものと期待される。



遺跡周辺（南上空から）

図版第2

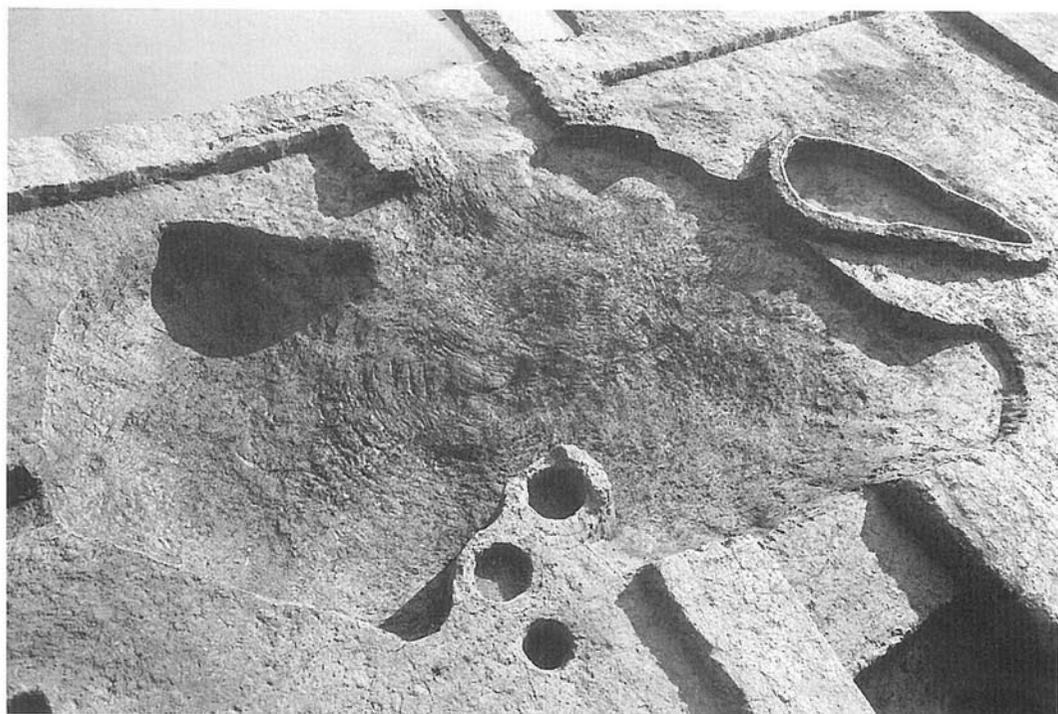
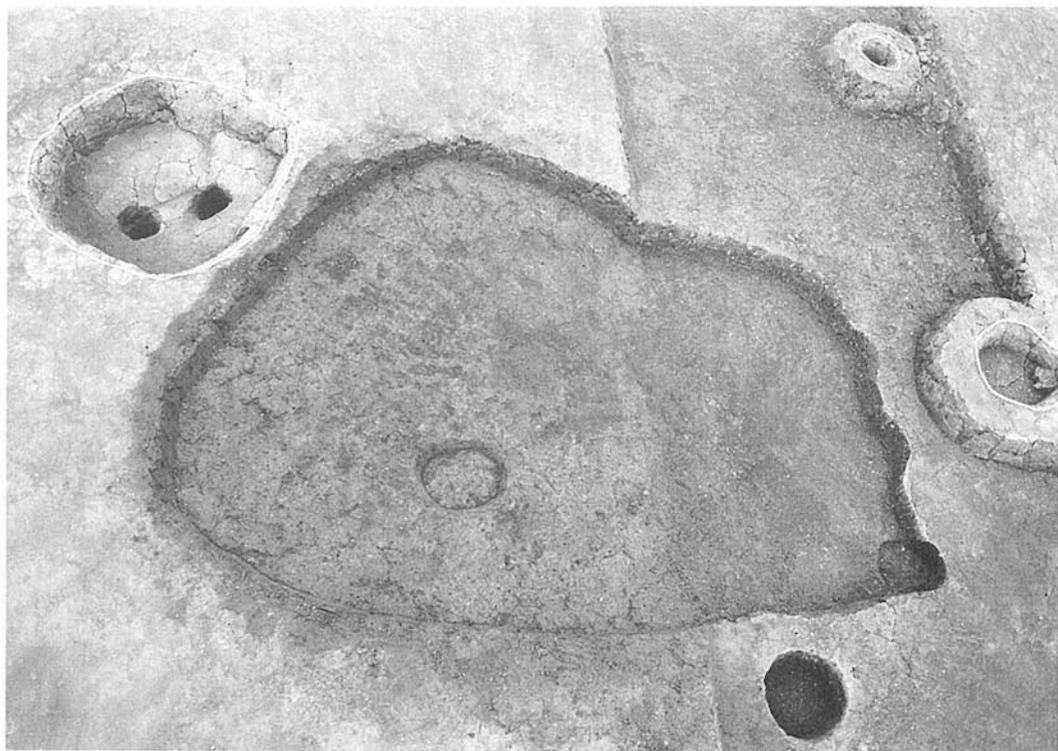


遺跡周辺（上 北上空から、下 南から）



調査区全景 (上 北区、下 南区)

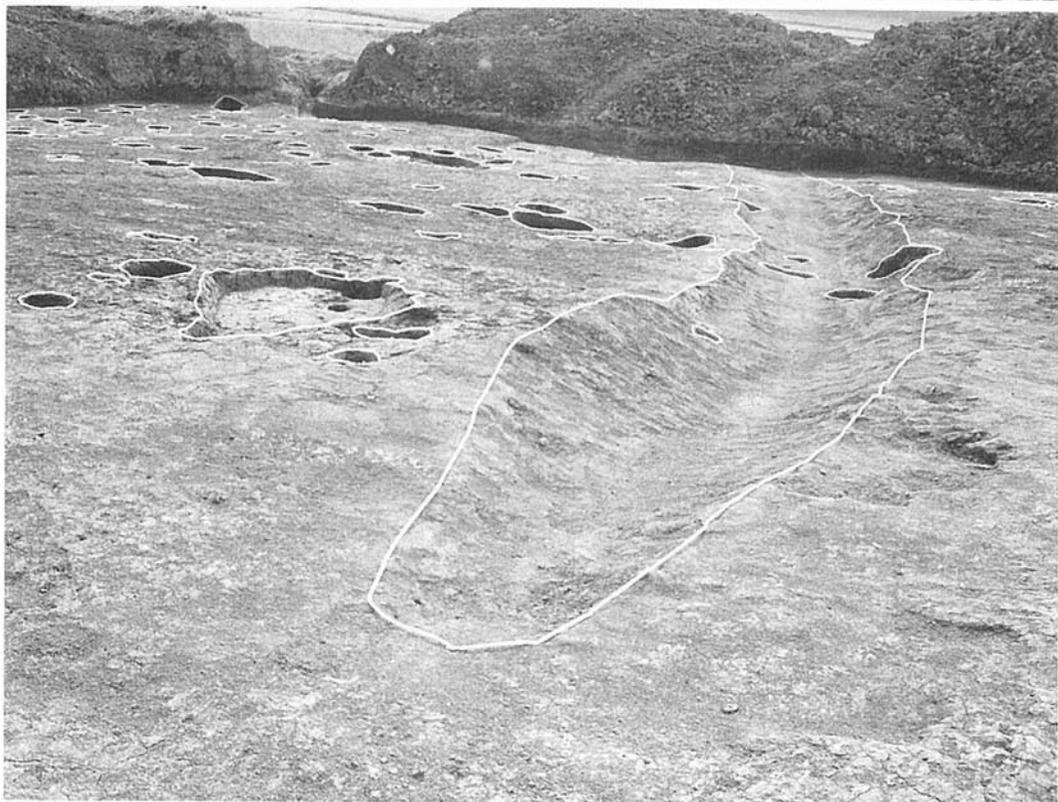
图版第4



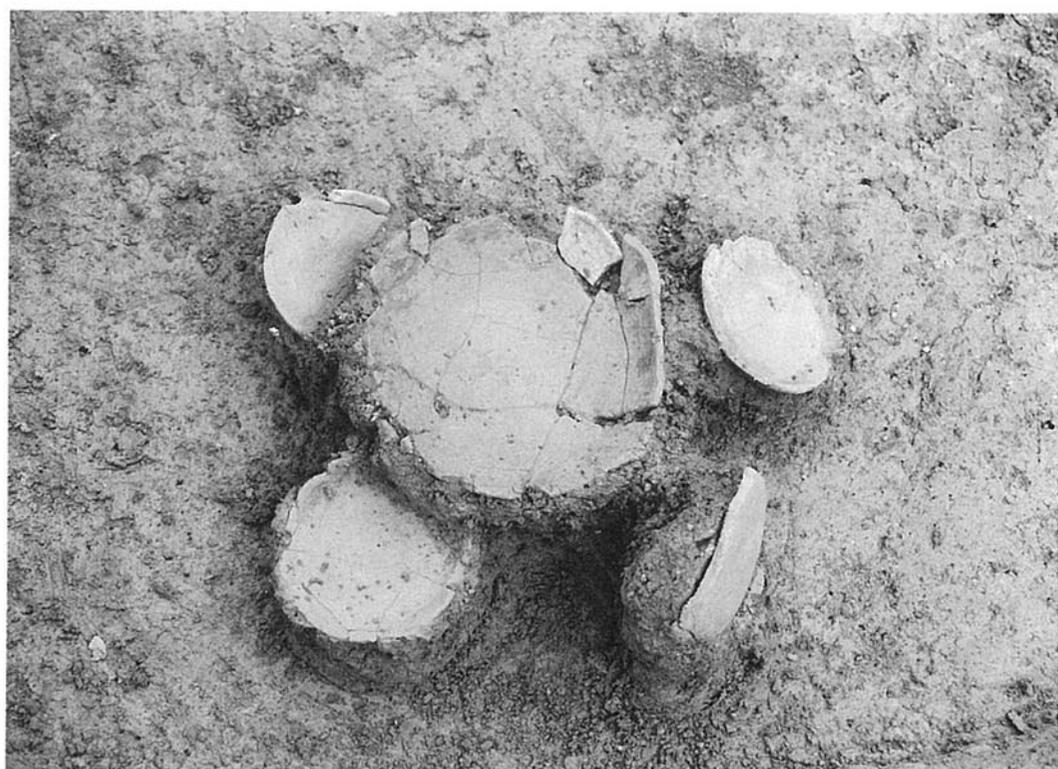
北区土坑 (上 SK01・SK02、下 SK04)



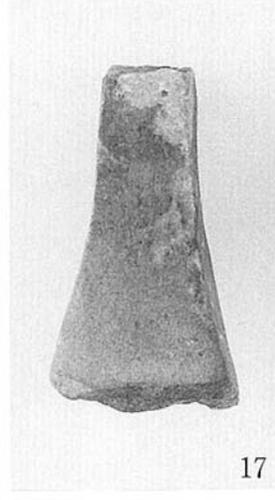
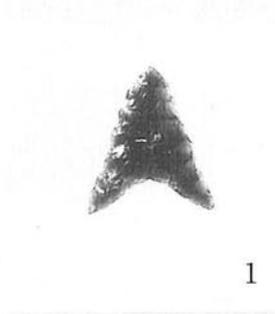
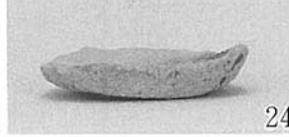
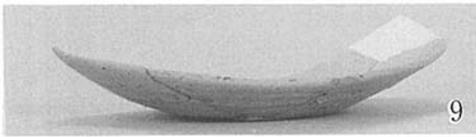
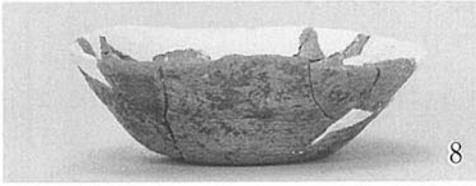
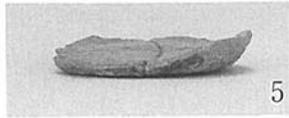
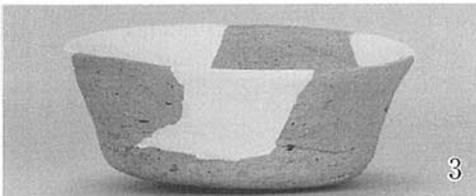
北区羽口出土状況（上）および北区完掘状況（下）



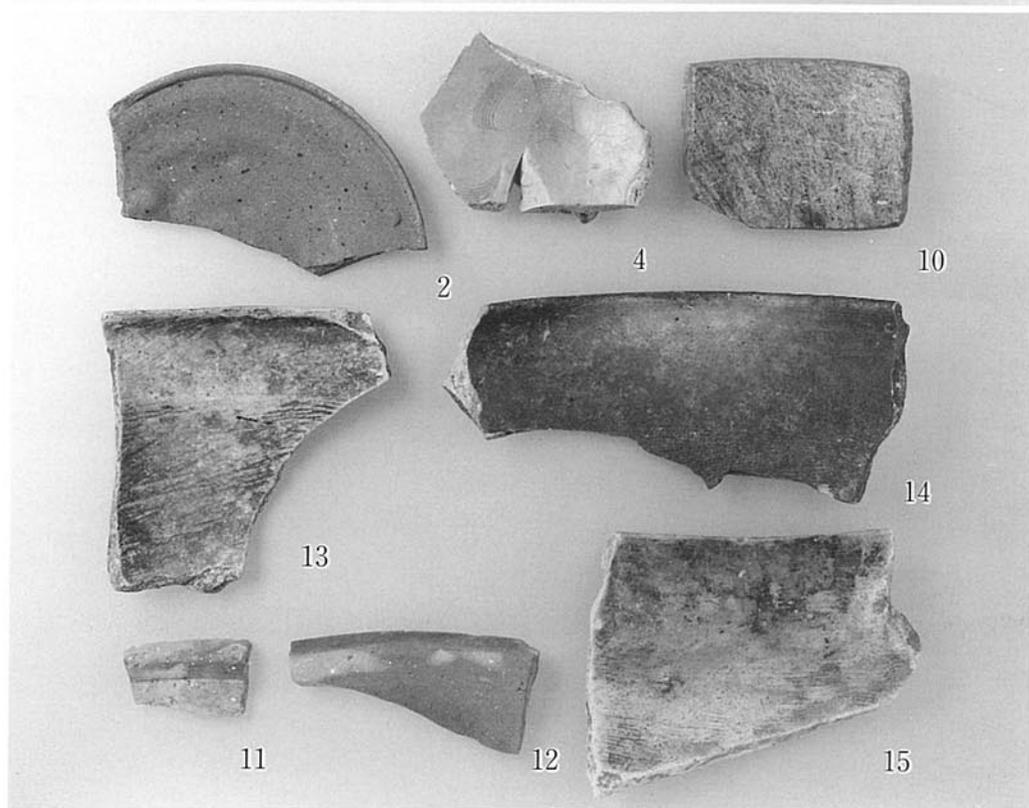
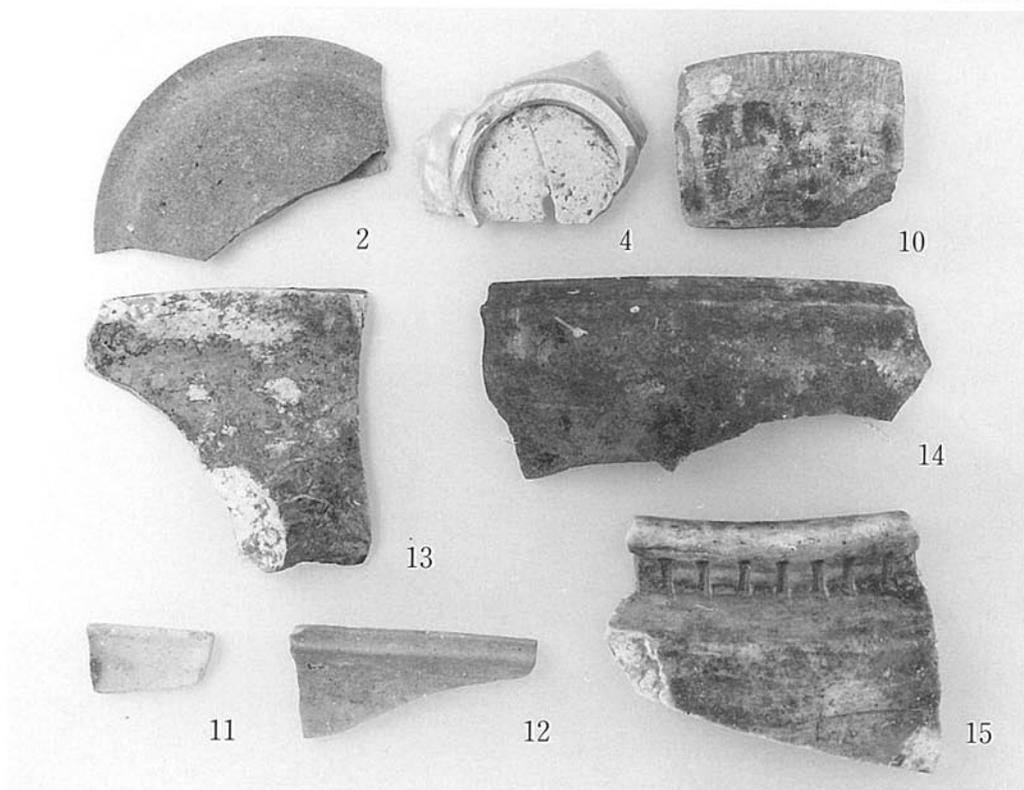
南区溝 (上 SD02、下 SD03)



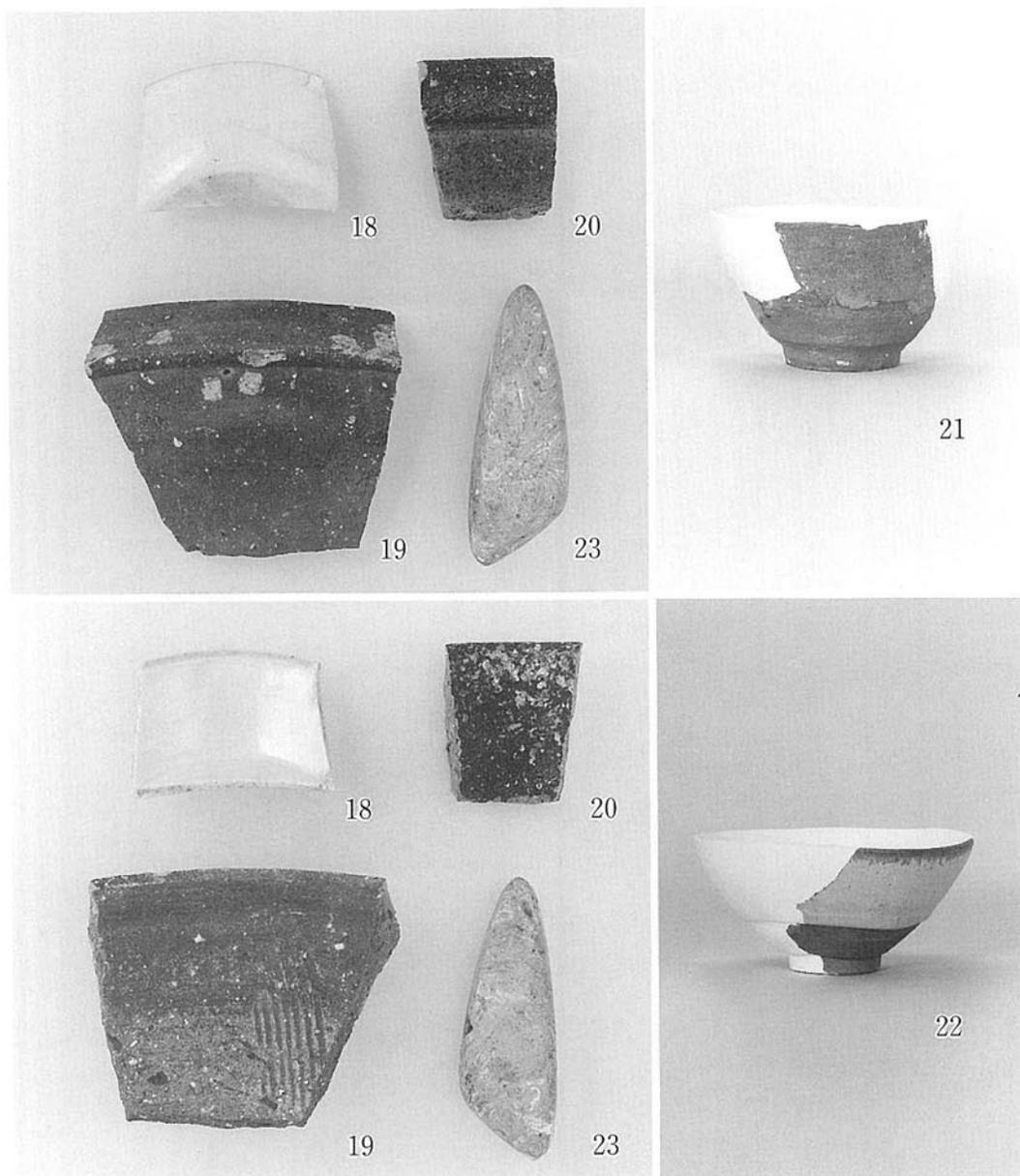
南区墓（上 ST01完掘、下 ST01遺物出土状況）



南区完掘状況（上）および出土遺物①（下）



図版第10



出土遺物③

山口県埋蔵文化財調査報告第170集

## 青景

—青景氏館周辺遺跡の調査—

1994年 3月

編集 財団法人 山口県教育財団  
山口県埋蔵文化財センター  
発行 財団法人 山口県教育財団  
山口県教育委員会  
印刷 大村印刷株式会社